

『神の時を思う』（伝道者の書3:11～13・1:2）

【開会聖句】

1:2空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。

1 人生は謎めいている

伝道者の書で特徴的な語である空（ヘベル）とは「謎めいた」という意味であり、元来、息や霧、蒸気といったものを指し、擬音語に由来するとも言われている。その意味合いは「存在しないのではないが、捉え難いもの」である。日本語で空と訳されているが、空っぽ、何もないということを示しているわけではない。先に述べたような蒸気を思い浮かべると考えやすい。蒸気は日常生活において一見何もないような印象を与えるが、もちろん実体がある。一方、実体は確かにあるが、通常、手で掴むことはできない。ここでは「空の空」と重ねることで、すべてのことは全くもって謎めいていることが強調されている。

2 本当に「ふさわしい」のだろうか？

そうした文脈の中にある11節前半の直訳は「全てを神はその時において美しくした」である。「美しい」という語は、美的判断というよりはむしろ「ふさわしい」「適切な」時ということにその意味合いがある。すべてのことには神の時があるが、それは人の時でないばかりでなく、人は神の時を厳密には見出すことはできない。その上で、神の時の中で、食べたり、飲んだり、働いたりする時を得ることは、2:24,25や3:12,13にあるように、肯定的な神の贈り物と見なされている。

3 神の時を思う

被造物にもたらされている「時」は、物事や活動にふさわしい時があるようにと、神によって維持されている（人によってではなく）。今回の箇所は、時間に対する二つの視点を提示している。一方は神の時を見分けることができないということ、他方は、その中で神の時を喜び、その中で食べ、飲み、労働を喜び楽しむことである。時間を司る主（あるじ）は人間ではなく、神である。人間は時間の中で生きているが、時間を支配することはできない。時間という観点から神の主権を思わされる。人間の理性、経験、観察では、神の時を理解することはできない。それでも、いやだからこそ、神の時の中で、神と共に人と共に生きる今の現実を地に足つけて生きるののである。